

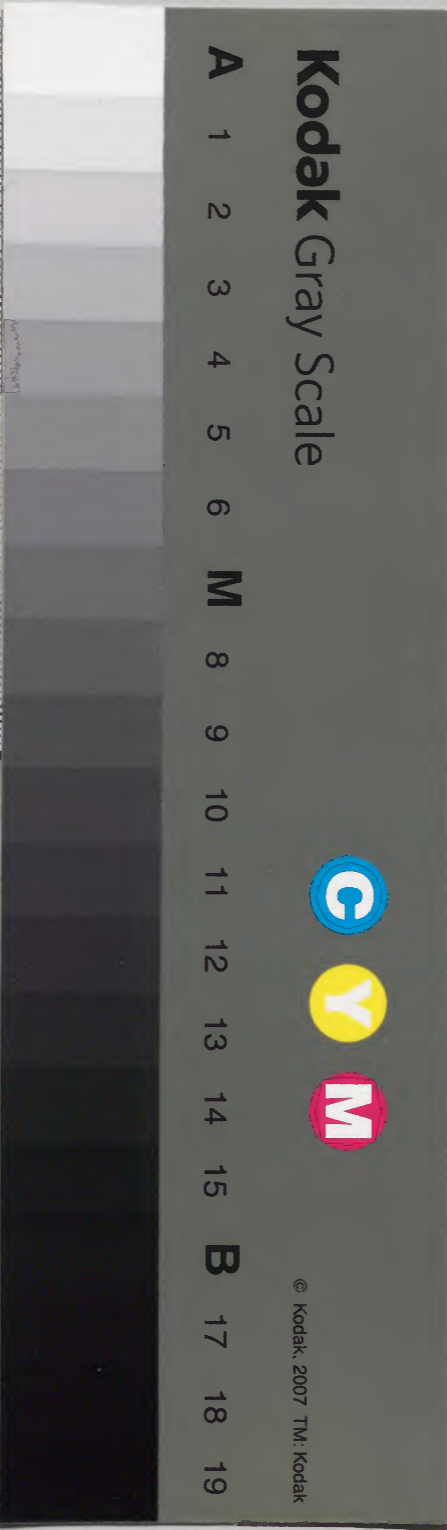
武家名目抄稿

職名部附錄二十

和書門類	二五二〇六號	七七函	一一架	四四九冊
------	--------	-----	-----	------

內閣文庫	和書類	二五二〇六號	四四九冊	一一架
------	-----	--------	------	-----

內閣文庫	
番號	和 25206
冊數	457 (82)
函號	153 275





武家名目抄稿第廿冊

職名部附録十五目錄

中間頭

中間

力者

走力者

雜色番頭 又 雜色長

朝夕雜色 又 昼夜雜色



國雜色

公人番頭

公人朝夕

小舎人童

牛童

如木

仕丁

武家名目抄稿第廿冊

武家名目抄稿第廿冊

職名部附録十五

中間頭

甲陽軍鑑云

信玄代也
人教条

所道具尻之十五人

所中間頭尻より劣る者をたゞれ心と到

強しそゆ心安者よてそとあれを所

舊代の中間小人の中よりをとり出し如し

此れを中間頭と武篇仕るは後文たふ

あまの河より一帯は他國の所く覺の荒子
とこの之者中まどくの中百荒なるとの
か標子指くくく末代をきめりもあまの
代よこの之何方かをも有るといふか
あまの河これをはるるを原右陽に感状十八公
布右佐十一種原豊前守十三久保田監物
六つ中村孫左衛門三久保田助之丞三河
野但馬四つ志村又右衛門五つ種原五衛門也

右坂島之流七つ
又云同横目荒種原五品守久保田助之丞
原右陽志村又右衛門中村孫左衛門河野
但馬石垣島之流種原五左衛門山本右佐
久保田監物右此十騎之由中守也一人
子甘る三千人馬小人馬中間馬道具荒より
之流野里馬播へ右此馬存くく一日一
宛番後を尾孫受甲州之北前をけり

鳴津家由成記云成子付方より由稅物者
候者立^中給一帷子二由在九由中間頭
本茂助殿

清須分限帳云御中間頭二百五十石度十
郎二百石又吉百五十石市藏同甚七郎同
左平同市助

見間難穰云高坂彈正組之物在子善急
其身自廻少し召連可集る由由死御則由

仲間頭久保田助之由之由考を為持組之由
中間頭五人召連集也

東遷其業云神君在と思召けるよや之由
主惣まこと下知し給ふ在多正信と由教四
郎在高門に由下知ありて人教を包了給
ふ^{略中}敵とまや近くと見えゆる時甲由浪の由
中間頭務系監物進之由く是穰^{キコ}と由
り起由の旗乃之也旗主務員ありとの由

斗の由海少して少多の前には扇子の由海
との斗可死と申上ん加西鶴を押し付け多
無し々家中の隠さし物述と巻をく
早より山陰を遷泊を終ひ加教の由
を不知云々

當代記云慶長十二年此春大刀弥太郎自
害是八大御所中間頭財宝不之者也此
八伏見ニテ中間中へ兵粮被下ケルカ関

東俵ニテ可渡ヲ上方俵ニテ渡シケル其
間ノ出目大分也引負間是ヲ可辨由ノ仰
ヲ無理ト心得令自害ト也上下哀愍之ト
云々

元如年福云二年卯月十七日終て由他界
西年七十五爰に哀成事有井手八郎右馬門
と申中間若菜より久松由奉公を申上
由馬之口を西敷なるに由陳し由借をお勤

中間

由常く申す事今夜は他界へ由を承我者
孫由借を恐る事といふとも由跡を去る事可
申由組頭畔柳助九郎之申旨令切後五果
長門本平家物語云成親の被召其のち入道
小平右といふ中きんを申す中成親門新
右細言此事と申す中合志入る事あり

いそぎまきより経入と申す山と申す山
りり

又云言師律教女房の申す事言師律教出はり

一とてはもととををいふ事いふ事
うさきぬ成う事か何をいふ事いふ事
うさをめさ誓ふ事いふ事いふ事
給ひまらるる事いふ事申すいふ事
む身の事いふ事いふ事いふ事

まひりほともまろきありなり

源平盛衰記云 衣笠合 義明十三已来弓矢

ヲ取テ今年七十九今此軍ニ會事老後ノ

面目也殿原コリ出給ス共イテ、義明

カケ出テ最後ノ軍シテ見セ奉ニトテ白

キ直垂ノ袖セハキニモミ烏帽子ヲ引立

テ雜色二人ニ馬ノ口引セ中間六人ニ左

右ノ膝ヲサセ太刀計ヲ腰ニ附テ右ノ手

ニ鞭ヲ貫入左ノ手ニ手網カイケリ既

打出ニトシケリ

又云地藏冠者ト云中間トナカ法師ト云

フカ者ヲ友時ニ相具シテ進シケリ

吾妻鏡云弘長元年二月七日巳亥將軍家

ニ所御精進始云々御精進中參籠人可供

奉之由兼日雖有其定人數不足之間被催

加之供奉人淨衣 御輿寄 武藏前司朝直 共侍 淨衣 立烏帽子

同中間淨衣 折烏帽子 尾張前司時章 侍同中間 三年

八月九日 丙辰將軍家御上洛事有其沙汰

来十月三日 御進發必然之間路次供奉人

已下事被定之云々 御路次間方々奉行人

事一御出奉行和泉前司行方武藏少卿景

賴中略一格勤侍小野寺左近大夫入道光連

一御中間信濃判官時清一御力者佐渡大

夫判官基隆一朝夕雜色小侍一小舍人侍

所一國雜色加賀前司行賴

義録記云 厚心せん ちろきんさうしき二

三人出く南より出らまふと云りれい

東下り云と一由きくよまもむ福んある

とまらふあまきるとのころまへとあけい

後次北らうせねあそ福を附のち志よく

さちのむ自よそ打あせをひうしあへと

けちをあそ福りゆと申てあうさうと

中間方人上下九人并者とも、くちあきあ
このさやま川一夢まらりまてあくとん
をのまじくとそあくとる

太平記云 畑六郎左衛門條 又中間ニ悪三郎トテ

欽唇ナル大刀アリ

又云 二五三ウ 頼負 回 忠條 時綱只一騎中間二人ニ長刀

持セテ忍ヤカニ土岐カ宿所ニ馳テ行キ

門前ニ馬ヲハ乗捨テ小門ヨリ内ヘツト

入テ中間ノ方ヲミレハ宿直シケル者ヨ

ト覺テ物具太刀枕ニ取散シ高懸カイテ

寢入タリ

又云 二五三ウ 長崎新左衛門 尉意見條 資朝ノ子息國光ノ中

納言其比ハ阿新殿トテ歳十三ニオハシケ

ルカ 中略 只一人甘副タル中間ヲ相ソヘテ

レテ遙々ト佐渡國ヘソ下ケル

異制庭訓往来云美仕者淨衣中童子狩衣

大童子水早中間男者色々直垂也

伯耆卷云基長宣山寺ハ加換子思信切せ

を承里ハ返ハ心安ク存知ハ船ハ尾

所登ハ若何ハ後ハの事ハ少ク思ハ召ハ知ハ生

人ハ事ハ可ハ死ハ再ハ事ハ少ク宣ハ山ハりハ借ハ中ハ宣ハ取

七郎ハを招ク宣ハ山ハりハ船ハ井ハ津ハ五ハ郎ハ三ハ郎ハ加

茂ハのハ樞ハ岡ハ入ハ道ハ此ハ等ハ許ハ人ハ行ハてハ可ハ云ハ換ハ隱

岐ハのハ帝ハ乃ハ所ハ借ハ申ハてハ船ハ上ハ山ハ之ハ藝ハハハ至ハ上ハ也

所方に参給へんと云遣け敷

建武式目追加云禁制條中一中間以下

革金銀梅花皮弓腰刀可停止事一同禁直

垂之緒裏緒腰并烏帽子然不可用事貞治

六年十二月廿九日

又云應安二年二月廿七日禁制中略中間凡

下輩エホシカケキ又コシヒタハノキ

又ウラ同大口刀ノカヘラキ金銀但又

事

又云僮約條略中一出仕僮僕事不可過中
間五人舍人二人將召具力者事一向可俾
止之

政所賦銘引付云沼田弥太郎光延文明十

十廿一

七条坊門壬生東北角地事自德治年中相
傳知行處今度一乱中赤松殿中間彦四郎
号買得違乱云々

鎌倉年中行事云正月五日ノ夜御行始管

領ノ御出恒例也御劔之役御一家御沓役

八人躰不被定略中御沓之役以下ハ中間五

人力者二人厩者兩人何モ烏帽子ヲ可着

又云正月廿三日鶴岡御社参日限雖不相

定依為廿日比廿余日ニ如此記之略中次ニ

御幣役并御劔ノ役力者中間人數不定

又云供奉之時奉公之供ハ太刀持中間一

人手振之中間四人小者一人力者二人
者二人

又云公方様御發向事中略御馬廻ニハ御中
居殿原号御寛悟面々御劔ヲカツキスワ
ウ小袴ヒツレキ小太刀一ツ充帶敷多御
供申ナリ御厩ノ者兩人其外ハ召替之御
馬ニ副御沓役力者二人其跡ニ弓箇負々
ル中間十人モ廿人モ又六人モ八人モ依

分限可召具其跡對ノ太刀持々ル中間是
又人數定事ナレ厩者二人傘持一人此等
出立ハ公方様供奉同前云々

花營三代記云禁制條々貞治六一中間以

下輩金銀梅花皮等腰刀可停止事一同輩
直垂之結裏結腰并烏帽子懸不可用事

又云應安七年五月九日夜強盜乱入禁裏
唐門警固人迹江國守護役家人目賀田彈

正忠入道玄仙代于時若黨令之追及之

則若黨二人中間一人討死

中五十六明德記云二条大宮ノ二度目ノ合戦ニ五

人ハ所々ニテ思ハニ討死ス九郎一人死

ニ残り誓約五人見エサリケレハ走り廻

テ尋ヨトツレタル下人ニ去ケレハ家喜

カ中間申ケルハ只今山口殿ノ御下部ノ

申候ツルハ昨日八幡ニテノ御契約ノ人

々コソ五人一所ニテ討レ給ツレ

又云駿河守カ中間一人走來テ申ケルハ

入道殿御出ノ時御送りニ出給ツルマ

城一モ帰り給ハテ麓ノ寺ニテ御腹召レ

テ候ト申ス

普廣院殿御元服記云永享二年七月廿五

日大將御拜賀中略執権僮僕次第童一人持刀

調度懸一人号胡雜色四人淨衣如木二人如木

下二。中間。四人 折烏帽子腰紐
大惟濃直虫也

竹崎五郎繪詞云関東へ系せむとする小志
ゆゑ乃ほ唐風とて免ありし錢のほら小
よそ目不審をわぶる錢目そ免あてんた
免よ一旦の作まそそあもむすらんはし免
て用金、給らむすそんとあそく身錢たの
まて同六月三日の時竹崎をたそくのむる
よいよく不審あひくたそよしりきてるちた

とあともらもうち錢くりするものな
あもなうりし免よあうく恨をあし奉り
て中間跡之郎又次郎三人はよりあひく

しそのむ

^{セミラ}松田長秀記云永享十二年七月廿五日大

將御拜賀供奉行列次第 中略如木二人 如木
下人
二人 折烏帽子腰紐
大惟中間四人 大惟濃直虫也

淨土所日記云自は産所還所は時若君攝

と申す。中。よ。ま。ま。下。む。ま。や。此。者。より。は
あ。う。り。・。・。中。を。雑。色。と。被。作。り。又
公。方。乃。は。雑。色。と。申。す。又。別。て。か。方。へ
忠。人。の。雑。色。あ。ら。ふ。て。ち。う。く。あ。ら。く。り。は
馬。や。此。と。の。う。り。を。は。け。り。を。か。つ。け。り
う。つ。不。付。し。ま。ぬ。時。を。む。ち。斗。こ。り。ま。さ。に
今。川。ち。双。線。云。は。こ。り。よ。す。る。ふ。り。女。に。ま。さ。に

か。あ。う。り。男。少。ら。た。り。り。あり。專。を。よ。ま。る
時。原。つ。な。れ。う。く。あ。かり。く。つ。ま。ん
て。か。こ。ま。敷。也。を。後。中。間。目。こ。り。を。さ
よ。ま。る。也

澤。巽。阿。弥。尊。者。云。正。月。新。日。は。出。仕。ま。う。ら
打。目。小。袖。巾。袴。類。織。物。也。は。中。間。名。は。一。下
あり。巾。着。方。に。被。持。領

所。借。古。實。云。常。此。は。借。り。時。指。う。遠。く。か。ま

中間小者返し
返し去中百の不苦い

馬具寸法池附編云孰は兼内松永澤正少
彌久翁より伊勢守貞孝へ被尋中條より
略中間小者ま——軍柄事

小者 小者 弓袋 弓の石 中間 中間
馬上 既者 豈持

打刀持之
小者 小者 太刀 中間 中間 中間

家中竹馬弛云沸方刀ありと哉は中間より後
一徳取時去とありと。徳をふくくがめは
中間より畏也。あるは庭上より志事也。ある
西中間は小者屋形のは縁へ上る事あり。の
ら去又去あり。流縁のより。後去る有ま
し。た也。西力者より長刀。杖。後去中より庭上
より。——但西力者より。徳をのめ礼をす
る事あり。あり

大内啓書云何方以是出之時供奉之
所中間小者因喜昇以下可被相觸
物已下之夏同當番々々相調色色以
去々々山供奉荒少後々々々々一啓書如
件文明十八年十一月四日

右丞三年保物守貞忠亭因成池云條々可
有用意奉右京北供奉茶原古波々民部一
献在之捲川式部丞所々々一献在々々同中間

荒々も橋被々々々

快元僧都記云天文三年六月石切十人鎌
倉舊跡切石等相尋廻廊之四方下地築東
者屋形御中間次郎右衛門西者彦九郎役
御中間孫右衛門奉行之

捲川親俊記云天文七年十月廿三日甲午
中間小首桐野河内々々下

室町殿日記云義長系都々々々々々か々々々時刻也

つりきれの敵方への御殿にこれ入るに
めきさきひく白子何なる由事らとて不
の布此中よりうまひをくそとみし歌中
日あゆ市あさけく〜ゆり〜小姓中又
去傳代の同朋中鷹く六十人中。間小去二
十人思ひく〜自害〜たり
永禄四年三好義成亭御成記云裏御門役
御中間衆也

長曾我部家格云中五羽儀奉行一坂之者
奉行在津流宿町掃除若由中間太左衛門
因六郎兵衛
豊池抄云雜色弓う佐不付小中間より下
厩者より上り小公家方その中間を雜色と
被作小
大弐常與池云天文七年九月初日宮内々
西局より文在く去月十九日曾我中間に張

下云云飛御由有哉方之と作舎舎て粟屋
危京亮之沙汰仕小宮川由公卿事可被作
小令分愚札可進之由小官常屋在京亮と
吉田四郎兵衛尉每人一書狀二通御進之
令返事到來りとの只今由之と世給小常
與披見小後可有再披見小由承之と云

又云同年同月五日行事御、就若呂喜之
俊蔭涼朝之書狀事如此夕水調之也是可

給小由承之小官候間申之と廿少之田原右京
進中調中之世と控者加判少仕中と進小
也

又云同年同月十五日進、官作書中ハ候
田事彼多理中間粮藉少付て且下知事候
神左以折紙申分同日行事被中官於為
此分者望別義小由中之也

又云同九年二月廿日今日辰下刻御是候

守ヲ鑑付玉ヒケレハ御中間ニテ有ケル
口中松若林カ首ヲソ打ヲトシケル此時
ノ勸賞ニ名字ヲユルサレ黒田松左衛門
ニソナサレケル

甲陽軍鑑云

北条家と松
家物語

信玄公宣々方將也

馬に乘てより其安若黨中間小者身近者
者ありと云々亦人前中間人念を
入給以目利を以て亦人前を免つ事よ

この字名付先自一指越心操を以てせし
義哉あそりしゆ故後子の世者其場を以て
たる武邊の自栢七八夜宛いふ事を述を
人前しら小人中間を則小人かしら名
付知行を下され馬子のり亦人頭を安若
黨十人亦人前頭も小人頭ハ小人中間を亦
人世人許經亦人前頭十騎小人頭十騎
あり

大同記云新羅國師進四千三百人馬僂流六

組三千五百人小姓流六組千五百人中。間

已下

愚耳旧聽他云南部智海此時濃石多桑一も大和か

智此中よむら上理右徳門といふ者あり

る。此者家人七八人あり。一もさくらや馬

の打きて流外款をうたんとて清は流が

てそ追懸きり理右徳門の中。間よ大和之

助と云者大和の名を冠て帯に七八人のと

可有と人の洒法をさるものなり。一も此者

具足ハ名を以て白袴巻を以てか。の太

のろく此まよりを尺斗よて長さ一丈の

りあるを召よのか。の振る。けて理右

門。馬をくみそをま。りりる

見聞難録云信長公。中。智。柳。及。女。と

云。い。を。双。と。大。音。中。一。て。馬。招。子。被。爲。意。馬

鳥の口をなせ或は陣中より下知を奏し
廟を舞ふ節は椰子介の呼吸を杯に経る
る大音也云々

又云緒頼公朱配振立し息を絶せし様
破を想ふにふれや者在と壇場にはるを
立し下知し給を橋の半より残玉を
突く掛るは中間三人の残すは陣より
人々扣き伏せし人々の突撃は白雲雨を掃

頼公彌穂をて鳥より飛下り答給
又云上板兵糧小倉方より夫人は天神宮
の近所より集り居し、怪き無長、言哉と
入る者あり、是も陣近集り中間、虎の中へ居る
故上板乃中間、虎の啼きをて虎もヶ板を節の
目鳥は前後を立ぬすも、本を振る長如は甲
の音入は耳、彌信は聞を成道世者と成て
と難言は不止ぬ外いで、彌信は引去る

——と自身堀へと給——とや

武林雜話云 黒田幼ヶ由の道代は 若黨の切者

主五石中間 少ら 三石と被定小人の多き

子多し 領内の 百石は子弟兄の才能を

よひ出ま 子 召き以年貢の由より定ら

る程引 り せり を 承かり申公仕

蠹簡集云 古佐五郎岡郡耕知 定雄は給由

事中間七郎五郎能高 分一 所為愛き

京中洞之内同 分一 所並及同村之内裁

知面之内田理 分一 所並及十代む の 同

村之内一 所 廿代中川京以上者 少 後

均 在 先 に 被作 甘 似 お たり ゆ け

必可 有 扶持 り 者也仍状如件弘治三年丁

巳三月吉辰吉門民新方丈 方

又云 古佐國長濱村雪 於豊州信親公忠死

借 之 荒吉良搦 守 中間 石谷兵部 少 輔

被官源今 蒲原弥吉郎 良人

又云 古佐玉高橋村 民家所為文書 中間傳兵衛習とて出

中間在近兵へ是裁下り習習里へく小

勿備馬や向へ事、子鳩懇、情をわくを

去るへと二人乃者、可中學を昨日為

死柳一人中官、こゝつる又遠く二人可

裁小諸篇を油所可相多るもの也五月

廿二日ふると親忠山いそく高久毒門

安土日記云天正九年二月廿八日五畿内

隣國之大名御家人ヲ被召寄駿馬ヲ集於

天下被成御馬揃聖王ニ被備御獻覽訖略中

御馬場入之次第御中間衆出立立烏帽子

黄成水干白袴スアリニ草鞋也七番夕、

山姥之出立ニテ此外坊主衆長安長雲友

閑御先ニ被参

多聞院日記云文禄三年二月廿五日園白

版京流名具由下向脚上下了及藤之志意
不及之中间難色。コ。シ。カ。キ。マ。テ。打。フ。リ
ミ。モ。ロ。コ。シ。サ。ス。由。伴。流。黒。金。犯。ヲ。獲。ハ。メ
タ。リ

當代記云慶長十八癸丑年六月廿一日於
江戸増上寺有喧嘩松平清六郎并鈴木平
兵衛二子知名不戰死是為人ノ迎打出待人
遲參其間増上寺立寄令見物處寺僧トカム尤之

若黨ヲ打擲彼兩人立歸是間ニトスル処
ニハヤ門前ノ者走掛テ右ノ清六切捨平
兵衛二子モ被官共戦死ノ間立返死但中
間小者ハ皆遁去ト云々此支長老并寺僧
可及難儀カト自他思煩処ニ公儀不及其
沙汰依之死セ儿者無念ト云々

力者

保元物語抄原本云為義降廿儿程ニ花澤
参條

半井本有法師字左馬頭ノ許ニ行テ角ト申義朝

大ニ悦鎌田ヲ使者トシテ加者共ニ輿舁

セ急キ迎ニ遣サレタリ

源平盛衰記云重衡向南地藏冠者ト云中

間ト十カ法師ト云フ加者ヲ友時ニ相具

シテ進ミケリ

吾妻鏡云曆仁元年二月十七日癸巳巳尅

御出野路宿先隨兵以下供奉人自庭上至

路次二行座列寄御輿之後騎馬隆親卿以

下於関寺邊見物云々次御輿被上御簾御

御加者三手

又云仁治二年十一月四日丁亥今朝將軍

家為武藏野開發御方違渡御于秋田城今

義景武藏國鶴見別庄御布衣御輿御力者

三手供奉著水干宿老帶野矢若輩為征矢

面々刷行粧頗以壯觀也

又云建長四年三月十九日癸卯今曉三品

親王関東御下向也辰一點令起六波羅給

御輿也午尅著御于野路驛御儲事中略力者

小舍人等分櫃飯廿五合夜着御于鏡宿佐

々木壹岐司司泰網儲雜事云々力者十二

手房上三手女并小舍人所櫃飯廿五具具別

櫃雜菜大瓶一荷折敷卅枚土器百廿前

又云弘長三年八月九日丙辰將軍家御上

浴事有其沙汰来十月三日御進發必然之

間路次供奉人已下事被定之云々御路次

間方々奉行人事一御出奉行和泉前司行

方武藤少御景賴躰一格勤侍小野寺龙近

大夫入道老連一御中間信濃判官時清一

御力者。佐渡大夫判官基隆一朝夕雜色小

侍一小舍人侍所一國雜色加賀前司行賴

太平記云大渡山崎是ヨリ後ハ橋桁七ツ

ツカス筏モ叶ス右^カテハイツマテカ向ヒ
居ヘキトテ責アクンテ思ケル處ニサモ
小賢ケナルカ者一人立封シタル文ヲ持
テ赤松筑前殿ノ御陣ハイツクニテ候ッ
下問々走テ出来ル

又云頓官心 替條相摸守火ニ突テ冗哀ノ者ト
天ヤ此等ヲ敵ニ受テハカ者ニ三人ニ杉
材棒突セテ差向タラシニ不足アルマシ

云々

常盤問答云常盤まこしめさきてその儀ふ
らは鞠言へ北なりすふふふおうし中さ
ありふんとおもひふま平若を北かせ
やとおひしめし一葉北社兼小事よ勢か
里そめふり乃日出ふはもあしり北こし
の志と志と遊さあしぬていふりきさ勢両
供北人ふい女房とち一二人ました北女

無云不窮同

建武式目追加云儉約條一中一出仕僮僕
事不可過中問五人舍人二人為又召具力
者事一向可停止之

鎌倉年中行事云正月五日ノ夜御行始管
領へ御出恒例也中御脊役ハ人躰不被定
其外供奉ハ雖不被觸直垂之出仕アル方
ニハ一人モ不残被參力者雜色朝夕小舎

人ハ人数不定

又云同月廿三日鶴岡御社參日限雖不相
定依為廿日比廿余日ニ如此記之中小舎
人無紋褐地之直垂ヲ著藤鞭ヲ持テ笠ナ
トヲソクスキヲソクカシコマルモノヲ
ハ成敗ス其次ニ朝夕其次ニ御雜色前後
ニ数多參御力者以下人数ハ不定

相國寺供養記云路次行列先陣隨兵一番

武田伊豆守源信在略之副張替中間男小笠

原兵庫助源長秀撰之副張替甲役皆中間男

此一番召具力者二人着頭皆、有文役等家例云々

松田貞秀記云永和元年三月廿七日石清

水八幡宮御社參常御代始御裝束如例淨

衣御出新造自東寺御輿加御力者十三人

牛飼五人雜色九人車副釜殿以下

明德記云京都ノ沙汰ニハ去ニテモ修理

大夫ハ一家ノ親方ニテ毎年穩隱便ノ沙汰

ヲ致ス仁ナレハ一往御書ヲ以テ御尋ア

ルヘシトテ十二月廿四日ニ御力者ヲ下

サレケリ

花營三代記云應永廿九年十二月廿一日

為大御所勝定様御代官御方長得御所様八幡宮ニ

御參竈自向御所御出先三條坊門八幡御

社參御始也自其直ニ有御社參御輿ハリコ

三御力者十二人師法自三寶院被進

又云應永世年十一月二日自善法寺御社

參御淨衣四方力者十人白役人淨衣

建内記云永享貳年二月廿五日新中納言

送使鹿苑院殿初比八幡御社參供奉人等

可注進之由被仰下之旨示之註申了云々

狀云明德二年三月廿八日乙卯今日室町

殿御參詣八幡宮中御力者三手也

御産所日記云若君御誕生永享六年二月

九日寅刻云々自御産所還時若君祿侍

供人數事吟弦役人三人伊勢肥後守小笠

系弥六已上五人御力者十二人皆赤垂下

以拾貫是等給云々中問敷人童六人宗

清中間童是等云々云々

康富七ウ記云嘉吉四年正月十日是日室町殿

有渡御於管領畠山左衛門督入道宿所春

万里小路御所様御乘車也御母堂大方殿

同有御出細代御乘也女房達出事一両云

々々

長祿寛正記云同年ノ夏ノ比ヨリ公方ノ

御母君高倉殿御不例ノコト有リ略中同八

月八日曉高倉ノ御所ニテ御他界アリ同

十一日寅刻等持院へ出シ奉ル白衣ノ御

加者十二人御棺ヲ昇奉ル

塔川親元記云寛正六年八月十日公方御

加者助関東一陣為由使下向仍三河国

山中今中警固事可以仰付由致左方中

之伺中以方力者伊豆一陣為飛

脚下向仍三河国山中今中警固宿送以下

事堅可以下知之由此仰以恐々

巖助僧正往畢記云大永六年二月十六日

八幡御社参從善法寺職掌御手輿也云々

二三人つゞくのこゝや但教まふ定又遠研
へは出乃一切とある時ふとい四五人召つゝ
者を何れか者ハ何時と一人也又常子生
か者を召連ぬをくゝらるゝら方縁の
は少者三人集る諸大名のハ数不足みゆ
二人より多時はあり諸家の内へ者まき
のこ何事と召川るゝ事京都よりハ野砂
ありや

^{廿五}光源院殿御元服記云天文十五年十二月
十八日御成次第_{略中}御小者六人此内一人
持御弓一人著御鞞但虎皮云々一人持御
張替但御弓袋白色云々御カ者持御長刀
御乗替馬小鶴毛掛鞍蓋御先引之口付御
廐者肩掛替之御轡供奉云々
永祿四年云好流若子義長朝臣亭御成記
云一御少者御廐者御輿昇降下部侍カ者

半銅車を一人舎人一人は流離者申者先
規程存貯之間可者如何由死由して何を
なかくせし柳ヲ江を流

天正記云 長曾我部秀長 大將秀長ハ陸路の

ゆくらふおろく あま城 是より人と以中

きり城さたむるあひと大船六百をうせ

ん三百をうせんあよりふふふきやうをさ

ためうらくのせんとく まきし 也 後 あい

かちを多てふし一志よせい一てにしり時を

あまやう あま を押ししに

西國癸向記云大船六百艘小船三百艘從

殿下定船奉行浦々船頭カ者立双櫓擢楫

諸勢一度相計盪時盪出鳴門沖

走カ者

季瓊日録云永享十年十月十九日東福寺

御成御齊管領御相伴走カ者緩急事有命

又云永享十一年九月八日洪恩院御成躰
走カ者甚接御輿前故今後可止之旨有_レ余
雜色番頭又雜色長

保元物語云源方々ふきぬと云さ九と六婦
ふ小流とふる事ふれいけうしきをふさひ
ま下野守のちとてつらひなる

吾妻鏡云治承四年十二月廿八日丙午出
雲時沢可為_レ雜色長之旨被_レ仰朝夕祇候雜

色等雖有_レ教征伐之際時沢之切異他故被

補_二彼職_一云々

又云養和元年三月廿七日片岡次郎常春
依_レ有謀叛之聞遣_二雜色_一於彼領所下總國被
召之處称_レ乱入領内乃御使_二面縛_一云々

又云建長二年十二月廿壹日壬午明春正
月御弓始射手事今日召_二整進奉_一有其沙汰
可_二參的調_一之人数及_二用捨_一於治定分者早可

相觸之由所被仰付于朝夕雜色番頭湯次
郎國弘木田太郎宗高和海三郎家真等也
義經記云其在房義經所討人あまのこして叶
ふふと雜色一人及くして去他の存るに
うち入る

東寺執事日記云貞治三年六月七日祇園
神興迎方之但少將并神人等武家小舎
人雜色等引て喧嘩神人一人に致害云々

仍神興三付血記神人等頂戴神興為振入
將軍所侍不馳向妨中之間振給路跡不
其後入御旅所云々

松田貞秀記云永和元年三月廿七日石清
水八幡宮御社參常御代始御袋束如例御
衣御出新造自東寺御輿和御力者十三人
牛飼五人雜色九人車副釜殿
又云廿三永享十二年七月廿五日大將御持賀

供奉行列次第神雜色四人淨如木二人如木

下人二人
大帷

慈照院殿拜賀篇目云雜色事注云永享親
光師記如木

雜色六人永享祐光卿記康曆度十人也今度

以省略之儀可被略之條可有難款如何之

由被申攝政之處御略不可有難候但康曆

被召具之上者少々可被召具之由被申之

仍六人被召具云々

大館常具記云天文七年九月四日御料所

宮川侍公用一向就無沙汰哉此雜色可

此意下以急札堅中下由宮内台處より

兼不以雜色井上之思食小所款景任由

問西村可致下分也同圖代布下江中付小

也如此此雜色意多下小事上急小切食小

たふ事小哉不然ハ之と可此人は耳小欲自

然之時一向不知食此江作小不可就

存此者宮内少輔一以書狀中事所法心へ。此
ついで不可^三中入^二事^一可^三下^二由^一兼^二之^一也
十九日^は雜色。西村九郎左衛門方より富
教在京免方へ進^進之書狀^{十五}也。至^未仍宮
川^は公用^は所^は法^事於^于今^不事^行内^二
重^有吉田四郎兵衛尉より一^忍札^下中^下
へく由^中也

又云天文九年三月廿四日雜色。以^関圖^言上

就^諸役^申免^見又^事との^後後^後後^先より^不不^不
之^所法^至今^後存^物ふと^押中^中所^成成^思
川^下中^中之^諸役^免除^ふの^き法^開役^請不^可
可^致之^所法^之由^中事^神不^當就^了先^之法^可
下^中法^出之^上中^法法^有へ^き我^可可^為
法^後後^由中^之

朝夕雜色 又昼夜雜色

吾妻鏡云元久元年三月廿九日 壬辰 伊賀

伊勢兩國平民謀叛事其後不申左右之間
頗非無御不審仍今日被遣昼夜雜色隨武
藏守朝政下知可發向之旨重被仰京幾御
家人之中去々廣元朝臣奉行之

又云建長五年正月二日辛巳明日依可有
御行始于相州御亭今夕被催供奉人是以
元日着庭衆所被拱也小侍所司平岡左衛
門尉實俊令朝夕雜色等廻其散杖云々

又云弘長三年八月九日丙辰將軍家御上
浴事有其沙汰末十月三日御進發心然之
間路次供奉人已下事被定之去々御路次
間方々奉行人事一御出奉行和泉前司行
方武藤少卿景賴畷一格勤侍小野寺左近
大夫入道光連一御中間信濃判官時清一
御力者佐渡大夫判官基隆一朝夕雜色小
侍一小舍人侍所一國雜色加賀前司行賴

太平記云僧徒六波羅召捕條二條中將為明卿ハ指
タル嫌疑ノ人ニテハ無リシカトモ叡慮
ノ趣尋問シ為ニ召捕レテ齋藤某ニ是ヲ
預ラル先京都ニテ尋沙汰有テ白杖有ラ
ハ關東へ註進スヘシトテ檢断ニ仰テ己
嗽問ノ沙汰ニ及ントス六波羅ノ北ノ坪
ニ炭ヲニコス事鑊湯爐壇ノ如ニメ其上
ニ青竹ヲ破リテ敷雙へ以シ隙ヲアケシ

レハ猛火炎ヲ吐テ烈々タリ朝夕雜色尤
右ニ立雙テ両方ノ手ヲ引張テ其上ヲ歩
セ奉ント支度シタル有様ハ見テモ肝ヲ
ケスヘシ
鎮倉年中行事云正月五日ノ夜御行始管
領へ御出恒例也力者雜色朝夕小舎人ハ
人数不定

又其才云正月廿三日鶴岡御社参日限雖不相

定依為廿日比廿余日如此記之中其次

御雜色前後二數多參御力者以下人數

不定云々

七鹿苑院殿御元服記云永和元年四月廿五

日御參内始中御劔細川右馬助賴基今日被仰

小侍所召
具朝夕畢

又云永享二年七月廿五日大將御持賀中

御路掃除事任先規被仰付侍所也奉行

人連署奉書以朝夕送進之御路注文自廣

橋家被出之案文封裏相副之每度洒掃加

連署

政所賦銘引付云宇津本福寺代申狀文明十五

五四糸西洞院与錦小路間西頼家倉等事

本主朝夕与四郎先年就貢物逐電刻依為

親類山名相州中間弥六与奪之弥六方ヨ

文明元十二十三買得之处与四郎立帰

押妨云々

國雜色

吾妻鏡云弘長三年八月九日丙辰將軍家
御上洛事有其沙汰來十月三日御進奏必
然之間路次供奉人已下事被定之云々御
路次間方々奉行人事一御出奉行和泉前
司行方武藤少卿景賴中一格勤侍小野寺
左近大夫入道光連一御中間信濃判官時

清一御力者佐渡大夫判官基隆一朝夕雜
色小侍一小舍人侍所一國雜色加賀前司
行賴

公人番頭

蟠川款元記云寛正六年三月五日壬子改
所公人新加左衛門下右衛門四郎五郎被執
申之

按此乃小公人番頭といふは鎌倉殿の雜

色あはれなりされとそ此給まり其のハ公
方よりあるそのゆふ公人と稱しそ私
の人ふだそらなり當政といふとも同
身分のまのふく格あのみとのといふは

公人朝夕

吾妻鏡云正嘉二年八月十六日壬辰將軍
家御參鶴岡宮寺及秉燭之期伊具四郎入
道歸山内宅之處於建長寺前被射殺訖十

七日癸巳依伊具殺害之嫌疑虜諷方刑部
允衛門入道所被召預對馬前司氏信也平
内允衛門尉俊職平判官頼入道條收允衛門入道
等同意令露顯去々九月二日戊申今日諷
方刑部允衛門入道所被梟罪也去々又平
内允衛門尉收允衛門入道等流刑就中俊
職為公人與此巨惡之條殊背物義之間被
配流硫黃嶋云々

大臣給中御路掃除吏任先規被仰付侍所
也奉行人連署奉書以朝夕送遣之御路注
文自廣橋家被出之云々

大永三年伊勢貞忠奉成記云公人は既
若成典昇成中御車之令入河系者以下
楷は是小日記在之

家中竹馬記云貢馬之次第是は恒以中御車
未だ下る事あり一
番管領二番山名殿三番土岐殿四番佐々

木宗極五番赤松六番佐々木六角七番中
條此次小鎌倉の法言と云三正系る近代
右關東の礼小依く不系管領乃法進上は
公乃極之法代官と云然同當職の法河
法不主是と一乃法馬共管領の法馬在中
昔一の法馬二の法馬三の法馬と云一
けると中比一山名殿乃法馬土岐殿の
法馬乃と其家乃乃法名字を中地朝夕

か役を一言興也され古法前乃道と申い
此射小も履文字を中乃里
他竹宗三関書云は所的をい下地よりも朝
夕役シヤウヤクをいし諺へて白布をぬくくししを
りて主上の的をりくる也
又云矢中は細夕二人を白布垂小大帷
を下小着志をいりけあるし
又云的の時の矢中二人を細夕此役也

一人ハ数塚北方乃捨小畏ルと一人ハ的の
方の前小畏時シ小的の方の矢中是也
は是也や小射手の二番三番目の間小畏
矢中射手の眼小畏時シに的の方の矢中
是早小川又教塚の方此矢中数塚二ツの
間をと成りて数塚より三間くら計れて
両方の者目標小畏五人ふり手と地小
つきて的の方の者前も捨も矢四ッ的小

あつる時ふふあつるとこ急を言ふ中
を御塚の方の者取て又うす法への阿我
と成りて日記付る人思ふに累り多思ふ
を地ふつまて言を言し己ああたうど中
てあふふあつると累也

光源院殿御元服記云天文十五丙午賦十
二月十九壬寅日於坂本樹下宅公方左馬
頭義藤朝臣後被号御元服之次第役者之

定中七松明夕夕イ役者御朝夕四人参候

走置下主ウ流故實云永禄冬二月六日壬寅午刻義

茶輝内有之一番御物中ねんあつふ、二人相ノ丸を鑑

昇公人の正男上下あり付也中法裏のき

まふ公人鳥帽子上下二三人次走流の供

流次法供流云々

増補家忠日記云慶長八年二月廿五日大
神君將軍宣下ノ拜賀行列一番御物調夕同

十人云々

又云慶長十年四月廿六日台徳院殿將軍

宣下ノ拜賀トシテ車ニ駕メ朝ニ入給フ

行列一番一人公人朝夕

揚子ノ小公人朝夕立謙倉履の的の朝

夕親色あり

小舎人童

吾妻鏡云文治元年十月廿四日癸酉今日

南御堂号長勝壽院被供養略高綱着御申候前

庭觀者難之以服立著甲上為失云々爰高

綱小舎人童聞此事告高綱

又云文治五年正月十三日甲辰及晚右武

衛使者小舎人號荒四郎到着云々

又云建久四年五月廿八日癸巳五郎者差

御前奔参將軍取御劔欲令向之給而尤近

將監能直奉抑留之此間小舎人童五郎丸

搦得曾我五郎留之間小舍人童止所
又云建久十年八月十五日乙亥鶴岡八幡
宮放生會中將家無御參宮共庫頭廣元朝
臣東帶為御使神拜家子二人郎等六人在
共給次步伐也中將家小舍人等前行云云
又云元久二年閏七月廿六日卒文右衛門
權佐朝雅候仙洞未退出之間有田基會之
處小舍人童走來招金吾告追討使事金吾

更不驚動歸參本所令目算之後自關東被
差上誅罰專使無據干道逃早可給身暇之
旨奏訖退出于六角東洞院宿廬、後軍兵
五條判官有範後藤元衛門尉基清源三左
衛門尉親長佐々木左衛門尉廣綱同弥太
郎高重已下襲列云々
又云建保元年四月十五日丙戌和田新兵
衛尉朝盛者為將軍家御寵愛等倫敢不靜

乏今夕已欲遂素懷存年來餘波參御所及
午朝盛退出不能歸宅到淨蓮房遍房草庵忽除
髮號實阿弥陀佛即差京都進發郎等二人
小舍人童一人共以出家云々
又云弘長元年二月七日己亥將軍家二所
御精進始云々御精進中參籠人可供奉之
由兼日雖有其定人數不足之間被催加之
云々供奉人淨衣和泉前司行方淨衣折高帽子廿々

相具又有淨衣小舍人童

冒采十六ウ
鎌倉年中行事云十二月朔日公方様御發
向事中公方様御跡ニ沓之役以下供奉之
久之不知其數仍御力者或十人或八人又
ハ六人何モ出長頭中トテ黒布ニテクマ
リテウシロノカタヲハヒロクシテ中一
所ハカリトナタルヲカフリシニロキス
ワウニワメタル小袴引敷ニテ太刀ヲハ

ク兄部ハ御長刀ヲ持二番目ノ御力者柄
長抄ヲ持其跡ニ小舎人其跡ニ朝夕其跡
ニ御雜色何モスワウ小袴ニテ小太刀一
宛ハク斗也
牛童

吾妻鏡云建久元年十一月九日己未二品
令參院内給御家人警固辻々云々自六波
羅御出先御參仙洞不追殿前直衣網代車八丈

如木
如葉行列先隨兵中次御車車副ニ云々

仕丁

吾妻鏡云正嘉元年十月一日壬午今日大
慈寺供養也中午一點大阿闍梨三位僧正
賴兼到南門外橋下之際遣手輿退紅仕丁
六人昇之
松田長秀記云永享十二年七月廿五日大
將御拜賀供奉行列次第中御車擲御車副

二人御牛飼如木一人副御雨皮持仕丁御

右車丸并香踏...



武家名目抄稿第廿冊

